

# 『歌道寄合肝要集』 翻刻と解題

飯田 さやか

## はじめに

本稿は、宮内庁書陵部所蔵の『連歌取要（内題…歌道寄合肝要集）』<sup>①</sup>（函架番号…桂・五七）を翻刻したものである。

『歌道寄合肝要集』は連歌の注釈書の一つであるとともに、中世竹取説話を記す史料でもある。竹取説話は、かぐや姫が卵から出生する卵生の系統と、竹に発見される竹生の二つの系統に大別される。そのうち卵生の説話は、鶯の卵から生まれたかぐや姫が帝と結婚をし、形見の品を残して去り、富士の煙の由来が語られるという筋のことが多い。この卵生の説話は、『毘沙門堂本古今集注』といった『古今和歌集』注釈書や、『法華経鸞林拾葉鈔』といった法華経直談書などに記されている。本書の竹取説話も卵生の説話ではあるが、かぐや姫が翁と結婚をするという点で他の卵

生の竹取説話とは重なることなく、独立した位置にある。<sup>②</sup>

竹取説話の部分に限っては、すでに南海博洋『対訳古典シリーズ竹取物語』<sup>③</sup>や『新編竹取物語』<sup>④</sup>に校訂本文が掲載されている。しかし、一部語句の抜けが見られる。

本稿は、『歌道寄合肝要集』全体を翻刻することで、この特異な竹取説話がどのような人物によって記されたのかを捉える足掛かりとし、今後の中世竹取説話研究および連歌の研究に供する次第である。

## 一．基本書誌

- 外題 『連歌取要』、表紙に直書。
- 内題 『歌道寄合肝要集』
- 表紙 萌黄色に浅黄色、花文散らし輪繋ぎ（七宝）

○装丁 袋綴じ（四つ目） ○丁数 二九（遊紙なし）

○半葉行数 十二行 ○料紙 楮紙

○蔵書印 「宮内省図書印」、「帝国図書館蔵」の角印

（二丁表）

○書入れ あり。○保存状況 シミ、虫損あり。

## 二. 概要

『歌道寄合肝要集』は、宮内庁書陵部の他に所蔵は見当たらない。<sup>⑤</sup> 識語によれば、天文七年（一五三八）に書写されたとある。

内容を概観すると、百二十二の項目が立てられ、それぞれ語句の注釈がされている。注釈の内容としては、足利義満の近習であった連歌師、朝山梵灯の『梵灯庵主袖下集』に記されている注釈と重なるところが多い。その他、一部ではあるが『続歌材良林集』や『宗祇秘中抄』と内容が似ているものが見られる。本文中に何度か梵灯の名前が登場しているが、梵灯が活躍したのは主に応永年間（一三九四～一四二八）であるから、直接の関わりは考えにくいだろう。『梵灯庵主袖下集』と本書の関わりについては別稿で論じたい。

それぞれの項目を見ると、寄合語の本歌として四十の歌句が引かれている。それぞれ「万葉に」や「人麿」、「源氏」などと典拠

が示されているが、多くの連歌の寄合書がそうであるように、『万葉集』などに典拠となった歌は発見できない。大半は出所が不明な歌であるが、たとえば①・⑥・③⑤・③⑥の歌は『夫木和歌抄』に収載されている。なお、『夫木和歌抄』が連歌の寄合書に利用されていたことは『和歌大辞典』<sup>⑦</sup>でも指摘されているとおりである。

四十ある歌句の中でも注目されるのは、⑩「おく山にしほるしほりハ誰ためそわか身をわけてうまるこのため」である。富士山を舞台とした、姥捨の話の中に引用されるこの歌は、『曾我物語』（真名本）に類歌がみえる。棄てられる母（『曾我物語』では姑）が詠んだ歌によって、帝王が姥捨の風習を中止するに至るという、いわゆる歌徳説話である。注目されるのは、『曾我物語』において姥捨伝説が記されている位置である。『曾我物語』も竹取説話を引く史料の一つであるが、竹取説話は姥捨伝説の直後に記されている。本書においても、姥捨の後に富士の陰里の説が記され、その後に竹取説話が記されている。とはいえ、『曾我物語』と本書の竹取説話は、内容はほぼ重ならず、影響関係は認められ得ない。しかし、両者とも近接した位置に姥捨の話と竹取説話が記されている点は、非常に興味深いといえよう。

他の注釈書との関係や引用される歌の典拠など、様々な問題を持つ本書であるが、本稿では一先ず翻刻の掲出に留めたい。

## 注

- (1) 以下、本稿では内題の『歌道寄合肝要集』を採用していく。
- (2) 卵生の竹取説話の一覧、分類については、拙稿「中世竹取説話分類の再検討(一)——卵生篇」(『大妻国文』53号、二〇二二・三)に論じている。なお、その際『歌道寄合肝要集』について言及した箇所で、「源氏が貴船で鬼に会う話が収録されている」としたが、正しくは「業平が鞍馬からの帰途で鬼に会う話」である。ここで修正しておきたい。
- (3) 雨海博洋『対訳古典シリーズ 竹取物語』旺文社、一九八八
- (4) 関根賢司・高橋亨編『新編竹取物語』おうふう、二〇〇三
- (5) 『国書総目録』および「新日本古典籍総合データベース」にて確認 (<https://kotensekinijl.ac.jp/biblio/100061260/> 2022/9/10 閲覧)
- (6) 十三丁裏十二行、十九丁表二行、二十二丁表四行および十行、二十三丁表八行に梵灯の名が見える。
- (7) 『和歌大辞典』明治書院、一九八六

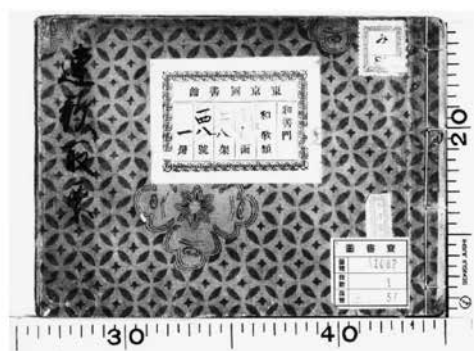
## 三. 翻刻

### 【凡例】

- 一 底本は宮内庁書陵部蔵本を用い、改行、字下げ等は底本の状態を極力とどめた。
- 一 用字は原則として現在通行の字体を用いた。
- 一 虫喰、摩耗等で判読が不可能な場合は□で示した。
- 一 ミセケチは、二重取り消し線を引き、訂正がある場合は右側に示した。傍書は、本文右側に「」で示した。
- 一 丁代わりは( )で示した。
- 一 誤写等が想定される箇所には(マ、)と記した。
- 一 引用和歌・句には①などと番号を付した。



内題および1丁表



表紙および外題

歌道寄合肝要集

- 一 浮雲の宮春日の明神の御事也
- 一 春日に浮雲の宮付へし
- 一 雨の宮春日の明神のまつしや
- 一 にて御座也これハ伊勢にて御座也
- 一 春日にもいせにも付へく候
- 一 風の宮伊勢の御事也付へし
- 一 さくらの宮伊勢の御事也是ハ内
- 一 宮なりいつれもくより合にて候
- 一 伊勢明神体松杉の名也百枝の
- 一 松千枝の杉是ハいせの御神体也
- 一 伊勢の法楽百枝の松千枝の（1オ）
- 一 杉あそはし候へし
- 一 北野に桜葉の宮と申ハいせの
- 一 桜の宮の御事也天神いまた人
- 一 間にてつくしに下給し時日本の
- 一 諸神に祈請を申給ひけるは
- 一 吾ふしきなるむしつをつくし
- 一 ゑなかされ候ねかわくハ我お神と
- 一 なし給ひて今一度都へ返して
- 一 我かとかの偽なるよしをいひはる

けむといのりたまへハいせのあハ

れみにて天神となり給ひて北

野へ帰給ひし也その恩ををくらん (1ウ)

ためにいせの内宮をうつしたまひ

て桜葉の宮とくわんしやう申

北野に立給也伊勢にては桜葉

の宮北野にては桜葉の宮也

かたみの水と申事昔業平

くらまの山寺へ参り給ひて下向

ありし時道にていつくしき女人

に行合給ひけり業平いつかたへ

御出候と問たてまつれる我ハ不

思儀なる所へまかり候と御返事

ありきなり平吾も御友申候

わめとありけれハ女人云さらハ (2オ)

此水をまいらせんみちくす

こしつ、落し尋給つ、必々われ

らか住家へ来たり給ふへしと

て手の内なる水を業平の御手

にうつしくれにうせにけり業平

くらき夜の道を此手の内の水を

すこしつ、こほし跡を尋て行給

へハふし儀なる大裏とおほしき所

に出給ひけりしハしやすらひ案

内を経たまへハ程勿女人いてあ

ひ給て業平を請しまいらせ彼女

おほせけるハ我ハ是鬼の娘也 (2ウ)

父母にしらせ申ハやかて鬼のゑ

しきと成給へしひそかに忍

ひ給へとありけれハ業平もお

そろし俱思食さて彼女人に

一夜契を簞夜もあけれハ

もとのくらま寺の道にかへり給

ひけり彼女人ハき舟の明神

のなり平に心をかけたまひし

と也是ハた、夢也と仰けれハ

此水を形見の水と申へしと

ありき跡を尋ぬるといふにも

又くらき夜の道にもくらまに (3オ)

もかたみの水よりあひたるへし

なにかしのいんなにかしの寺とハ

くらまの寺也名のるといふにも

なにかしの付へく候かの寺にけつ  
 しの大将未少人にて文よみ  
 手ならひしたまふ時おこりと申  
 ふるひやみし給ひける也歌道  
 にハわらハやみと申也何も同寄  
 合なるへく候

一 朝の原芳野にあり本哥萬葉に

①霜さゆる朝の原の冬かれに

ひと花さけるやまとなてしこ (3ウ)  
 冬にもなてしこの花あるへし

一 雉をも朝の原に付る事あり本

哥万葉に

②よし野山春ハかり場にあらね共

朝の原にきしそなくなり

一 瀧の都芳野にありおなしあし

かきの都吉野にあり何も寄合也

一 吉野山ハ唐の金峯山と申山

日本へわれ来る也吉野にもろこ

し付候事ハ是也吉野ハかねの御

たけとも申なり

一 芳野にこもりかつての神夫ふ (4オ)

の御名也こもりの宮ハ男神也かつ  
 ての宮ハ女神也いづれもよりあ  
 ひなり吉野にいもせ山と申事  
 も此ふうふの神の故也芳野  
 におなし妹瀬川と申も此神  
 のいわれなり

一 吉野にくすのおきなと申ことハ

昔芳野、王につかへし臣下也

此くすのおきなとハ諸国(マ)より

君へ備し御調物をそうしあ

俱る大臣也取分つくしよりの

はらかのみつき物をそなへし物也 (4ウ)

はらかとハうほの名也くすの翁

くすの人たゝくすもはらかも

吉野、寄合たるへし本哥

③代々ヨリヨリをへしくすのおきなのなかりせハ

はらかの御つきたれかそなへん

一 寿の洞是ハ大内の御事也露

の洞とすれハ春也是ハ仙洞と申

仙洞ハ王の父の御住家也山を洞

といふ也

一 位山も大内の事也くらひのたかき

を山と申也是山類にハあるへからす

一 雲井の菊大内の事也庭なる(5才)

きくくらひ高きゆへ也菊衣天

上人き給ふ也菊の花を絵に

かきたるきぬなり

一 萩の戸大内の事也萩を植たる

故にはきの戸といふ也大内に付へし

一 萩藤是も大内の名也萩を植たる

故也一きくの名 秋の花おとめ

草まさり草 山路草いつ

れも菊のいみやう也九月始也

一 須磨の桜菊とする事は八行

平の中将殿源氏より前に須

磨に三年住給ひける時桜と(5ウ)

菊をうへおき給ひて春秋を

送り給ひし也本哥に行平

④すまにても都の花の袖なれや

春ことかほるむめの下かせ

⑤千里にてこれをそいわん年毎トシゴトに

きくうへてまつすまの浦人

一 須磨の鈴舟と申事ハ是ハ源氏

すまに下給ひしハ春也三月

廿日あまりなるに源氏都のよ

とより御舟にのりたまひけるに

御舟にすゝをたてたまふ也天上

人の田舎下にゑきろのすゝと(6才)

申是山路夜行にもまゑんけ

しやうの物あたをなさす旅の

おもふまゝに行也彼舟をこきよ

せたまふ時須磨の上野にて雉子

おほくおとろきて鳴ける也源氏

取あへす

⑥すゝ舟をよせくる浪におとろきて

須磨の上野にきゝすなく也

すゝ舟にきゝす淀須磨付へく候

すまに淀付る事ハ源氏よりの事也

玉かつらと申ハ夕かほと申せし源

氏の浦マに女房メの娘也あかしの(6ウ)

浦に渡らせ給ひし也其時七才

にてまつらに下給ける也松浦は

源氏の在所也みな親類住給ふ

也さてこそ玉かつら七才にて下給

しか其後廿の年都へかへり給

し也光けつしハ玉かつらの

ま、をやにて御座也源氏しやうた

いなふして又玉かつらにさひ愛し

たまふ也其時契を新枕と申也

此意を付へし

一 松浦姫と申せしハもろこし人お

恋て涙は川となり給しハ石と成〔なまじい〕（7才）

其後松浦姫となりてつくしの

松浦の里に鏡の宮と跡をたれ

たまふ也鏡とハまつらの里の名也

此所なれハか、みの宮と申也

又鏡のわたりと申ハ鏡の里の

入江の渡りを申也松浦にか、み

山か、みの宮鏡のわたり何も

寄合なり

一 伊勢にも鏡の宮御座也これに

ふたみの浦二見かたすへし

一 大の浦いせ嶋也伊勢の嶋を分

たるしま也お、の浦に山なしなと（7ウ）

又た、なし共付へし本哥

⑦桜あさのお、の浦なししけれど、

あかてわかれし花の名なれハ

⑧さくらあさの大の浦波立かへり

あかてなかもむる山なしの花

一 椿吹春也花椿もた、椿ハ雑也

一 火桜つ、ちの名也実のさくらにハ

非す花の赤を火にたとへたる是也

一 つけ種桜のいみやう也発句にアリ

三月也

⑨しらぬかところつけ種の盛哉

一 墨の雉春也やけ野に残る（8才）

をいふ也是をかふなる物にもよそ

へ哀なる事にもたとへぬる也

一 朝鷹ハ春也春の朝ならては

雉子鳴す候程に聞をく事をあ

さ鷹といふ也

一 只鳥雉の名哉春也

一 かほよ鳥ハ雑也そなと申鳥の名也

一 ひ〔な〕鶴とハつるの子の名也春也

一 姫桃ハにかも、の事也御酒種も、



の名也三月三日に酒へもゝをいる、  
事也何も春もおなし三年の花

三年の種共申也桃の異名也（8ウ）

草の新葉花の新葉初春也

一 藤をハ松名種さのかたの花藤の  
名也

一 ほとん卯の末五月廿日以前迄ハすへし

山橘廿日草名取草となり草

ふかみ草夜白草何も牡丹の異名也

一 青嵐夏也 六月すへし又夏

引のいと桑子のいと也

一 ふかみとり五月也山のふかみとりハ

草木のふかみとりいつれも夏也

又ふしの桑子共新わた共するか

わたともたゝわたも鄙<sup>2</sup>ちわた（9オ）

いつれも夏也

一 みつき物に都へ富士のこほりより

綿を年くまいらせし也ふしわた

も駿河わた此故也

一 富士は日本の蓬か嶋也昔唐より

日本へ葉を尋て仙人こへしか

『歌道寄合肝要集』翻刻と解題

一 富士よりくすりを取て唐へ販  
けりふし蓬か嶋葉など付へし  
昔都に不思議なる君か代かあ

りき此王日本の人の親五十に

なれハ野山へ捨よと云せんしあ

りけれハ人々かゝるうき事ぞ（9ウ）

あらしと親もちたる物共みな悲

しみあへりある者駿河の国に

ありしか吾母の五十にあまれば

富士の山の奥に捨てとおもひ

たち此女を列たち行ハわかす

てらるゝおもかなします我子の

かへらんために道のしるへにしほり

をゆひおきけりまことにあハ

れふかきためしなりこの母富

士の奥山にて哥をよみける

⑩おく山にしほるしほりハ誰ためそ

わか身をわけてうまるこのため（10オ）

此哥みやこの王聞しめして哀

とおほしめしつゝ、其後ハ五十に

なる人おも捨てさせす悪心をも

留めたまふも哥道の故とかや此  
縁により富士にしほりおやを捨る  
と云詞寄合候へし

一 富士の陰里と申ハ人間の住家  
に非す天人の生土也ふしにあま  
おとめ天の羽衣あまとりとも  
いふハ天人の事也

一 富士の本説むかし駿河の国に  
かぬきの里と申所に翁一人有（10ウ）  
きわか苑の竹を植て年く

此竹をきりてうりて世をわた  
りし也かくあれハあた名を竹  
とりの翁と申せしなり其後  
苑々竹に鶯か巢をかけて鶯  
のかい子をもちし也竹取の翁こ  
れをとりかいけるかいつくしき姫  
となりぬふしきなるためしにや  
とて駿河の国師都へそふし  
給ふにより七才と申春の比  
彼姫都へ登らせ君の御目にか  
け給ひけりきみもふしきと（11オ）

被仰やかて竹取の翁の家へかへし  
給ふ也さる程に彼姫年月積ハ  
此翁の妻と成ぬ日ころ廿一年  
くらしける秋の比彼姫我ハ是  
昔天竺<sup>テ</sup>にてのきさき也翁は  
王成りし也わかもろこしにても  
契をなし又日本にてもかく有  
こと三度也今ハはや我か古郷に  
かへらんとておもふといひけ<sup>れ</sup>は  
翁名残をおしみりうていこかれ  
ける也かの姫ハ我かたみに鏡を  
ふたつにわりてかたくハ翁に（11ウ）  
取らせける也彼かたみをみては  
鳴見てハ侘ぬるまゝ七年か  
程のおもひの涙けふりと成りて  
鏡ももへ一夜に山となりぬ富  
士ハこほりの名也山ハおもひの  
涙鏡ともへて一夜に山となり  
にけりされハふしにむねの煙  
思ひのけふり又鏡をわると  
も鏡にもゆるとも付へし彼姫

の名ハ竹姫かくやひめうくひす  
姫鳥のこひめともいふ也竹とり  
の翁付へし（12オ）

一 秋のころもかへハ九月一日の事也  
天上人の衣にわたをいれかへた  
もう也是を秋の衣かゑと云也

一 夏の衣かへハ四月一日なり  
皇の衣の名也天上人ハ卯月  
一日よりハねりぬきをめし  
給ふ程に皇と申也

一 あふきたふといふハ天上人の  
卯月一日扇給ふハる也た、  
あふきとすれハ六月也又あふき  
の雪是も六月也絵にかき  
たる事なり又夕かほの雪六（12ウ）

月也花を雪にたとへたる也  
又富士の雪同事也富士の初  
雪ハ六月十六日なり

一 氷室桜六月花咲桜也実  
のさくら也富士桜みむろさくら  
の事也夏也

『歌道寄合肝要集』翻刻と解題

一 北国にハ六月こほりの内に咲  
桜也 一越中にハ雪に郭

一 公なく也富士にも雪にも時鳥鳴也  
花の君夏也かきつはたの名  
也されハ業平あつま下の御

一 時三川の国やつはしの宿にて（13オ）  
一夜と、まり給ひしにかきつは  
たの花いふにさけるを御覽して  
一首

⑪ 都をそはる／＼きつ、あつま路の  
花のきみにもひと夜鳴にき  
本哥此業平の哥によりかきつ  
はたをハ花の君と申也卯月  
にすへし千句などにすへし  
百韻連哥の発に花のきみ  
あるへからす後のために書也

⑫ 花の君かけに露あるめくみ哉 〔朝山梵行〕

⑬ 花君かけ露あるめくみ哉 〔朝山梵行〕（13ウ）

一 菊には更に読なきと申へ□人  
丸

⑭ 朝ちふもまじる草葉のかくるまで 〔ル〕

野にの<sup>こり</sup>ける秋しへの花

此本哥により菊を秋しへと読也  
都においてかんのかうち殿発句  
十月のきくを

⑮花は冬名ハあきしへの盛哉

かやうにかへし

一 花のあに梅の名也梅ハ諸木より

まへに花咲故にあにと云也初春也

一 花のおと、菊也菊ハ千草の（14オ）

後に花さくゆへに是九月す

へしあにおと、いふ句に梅きくと

かへし梅ときくとすれハ雑なるへし

一 錦鳥といふ事二あり是ハ恋

の中立する女にしき鳥といふ也

⑯三年までかひそたてたる錦とり

我かおもふ中のつかひよくせよ

一 恋の中立と云に錦鳥つけ

へく候是ハマことのにしき鳥也

萬葉本哥に

⑰み山への紅葉の陰のにしき鳥

よる八月にや声さらす舞（14ウ）

一 雲つ、みなる神也五月の田うへ

なとはやすと云句に雲つ、み  
付へし又淀つ、み波打など、

云にも又時をしるを云にも雲

つ、み付へし

一 河つ、み七夕の名也七月也都の発句に

⑱波や打星の名にある川つ、み

一 七夕の宮いせのまつらやにて御座

也秋に非す秋の七夕しほくれん

時すへし

一 ほし合の浜も伊勢に有名所

也七夕の宮とおなし寄合也（15オ）

一 つく鳥の国つく鳥の嶋何も

同筑紫の九ヶ国の名也いまた

日本国ともならさりし時ハ九州ハ

み、つくといふ鳥の住家の嶋也

国ハみ、つくのすかたの国なり

殊更に唐土よりみれハみ、つ

くといふ鳥に似る嶋也さてこそ

つく鳥の国つく鳥の嶋も筑

紫かたにより言にて候もろこし

ふねハ松浦かたちをうつすと

いふにつく鳥の国共嶋とも付へし候

一 津の国のかひの駒と申事ハ昔難（15ウ）

波の天皇の津の国に住給ひける

時の事也ハ天竺よりの馬也

かひの駒に佛も付候天竺にては

佛も馬にのり給ひし物也津の

国かひの駒にのりの道難波に

舟付へし

一 姿のむしとハたぬきの名の事也

本哥万葉に

①9 野、おのかすかたのむしをかるやらん

いわ尾の内にけふりたつ也

一 野、おのと申ハ野に住ますらお

の事也鹿を取たぬきをころす（16オ）

物也是をますら共云の、おの共

申也すかたのむし岩屋のけふり

なと付へし

一 猿の文と申ハとうにて本説アリ

唐に鏡花と云下人ありき此方

へさる詩を作て送りけり哥

道にハ猿の文と申也唐にてハからの

哥と申也此猿の文ハ木葉にて

書たる也木の葉の文さかて御付

くへし是にけいくわ可付候下人也

一 もろこしの哥ハ詩の事也又人の国

と云唐なり我が国といふ本朝お云也（16ウ）

一 旅する神と申ハ天神の御事也

筑紫にくたり又ハ都恋しき

なと、云句に旅する神付へし

都へかへるなと、すれハ天神の御意

に叶ものなり

一 花のたひするとハ天神の御跡

を思ひ北野より九州安楽寺

へとひたる梅也飛梅とハ是也こ

れハ紅梅也今もつくし安楽寺に

有と云云

一 三笠山と申ハつくしにも候也三

笠のこほり也さいふの安楽寺ハ（17オ）

三かさの里の其上なる山を三

笠と申也

一 大和にも三笠山あり春日と申也

一 かるかやの関つくし安楽寺の前なる  
里の名也彼所にて天神の御こ  
くのためと関を取也これをはかるかや  
のせきと申也

一 紅葉の箱是ハ仏法をおさめ  
たる箱也五色にいろとりたる  
かとに紅葉のはこと申也ひえ  
ひ山にあり仏法の道ゑひ山  
より付へし紅葉も付へし(17ウ)

一 四の関と申ハ日本にてまつり  
ことの有し時延喜の御門さた  
め給ふ此関く庭鳥をよ  
つはなち給ふ 一相坂の関  
にてハ夕告鳥たつ田の関にて  
ハくたかけと云山崎の関にてハ  
おなしかひ鳥すゝかの関にてハ  
とよ鳥是みな関の名も鳥  
の名もかハリぬるとなり

一 小鷹つかひと申ハ是ハ七月  
七夕に都にてすまふを取給ふ也  
八幡の御前にて七夕まつりの時(18オ)

の事也小鳥つかひ秋也本哥  
万葉に

②⑩秋くれハ七夕まつりいそかれて  
ことりつかひもいまやしるらん

一 小篠の文源氏(マ)の北野にての  
ふみ也是宇治の浮舟の方へ  
おくり給ひしふみ也おのには篠  
の文字治にも又笹の葉の文  
付へし

一 打とけ文是ハ宇治の浮舟より  
都かつらの里にけつし住給  
し時うき舟より心に偽な(18ウ)  
くうちとけ給ひて源氏の方  
へ送り給ひし文也朝山梵灯  
恋の句に都と云也②⑪宇治よりの  
打とけふみをけふよみてとあ  
りし也

一 三嶋江津の国の名所也難波  
の蘆にまさる名所もおもしろ  
きあしありき本哥に

②②津の国の難波のあしもかわらぬに

花おもしろきみしま江の蘆

あしのほを花と本哥に読たる

- 一 三嶋野は伊豆也三嶋ハ本ハ伊（19才）  
与の国なり伊豆へうつし申也

本哥人丸

②三嶋野や手向の袖の花の色

しらゆふかくるかしこねのみや

- 一 かしこねと申ハ三嶋の明神の

御事にて御座也三嶋の明神の

父母にて御座故也かしこねにみし

まち、は、と云ことも付へし

- 一 武蔵野、尾花かりと申は

名所也人丸のあつま下下の御

時小花かりと申名所にと、まり

給ふなり其時のたひ衣にをも（19ウ）

たかといふ草の花すり衣

をき給ひし也されハ武蔵

野におもたかすりの衣寄合

にて候又尾花かりにも付る

なり

②武蔵野、小花かりの人ならハ

をもたかすりの衣きせまし

是は旅人の御哥也

- 一 高津の都岩みの国の名所也  
人麿年経て住給ひし所な

れハたかつの都と申せし也

- 一 野、宮竹の都いつきの宮是ハ（20才）

伊勢の齋宮の御事是に業

平の御名付へし

- 一 業平の御名ハまめ男あつま男

とよなり男かふりの女なぞらへ男

何も業平の御事也

- 一 夜人と申ハ伊勢の齋宮の女御

つかへ給ふねうはう立の御事

也業平の寄合に夜人付へし

- 一 花のつまと申ハ万の花の

姿のたをやかに見え渡るを

いふ也桜の花つま草の花

つまなどハ何も姿の打なひ（20ウ）

きたる体也

- 一 妹瀬のしるしと申事ハ我かお

もふ女などの外へ心をうつして

かあらんとおほつかなき時いも  
りといふうほの血を主にし  
らせすして衣に付く置也

もしよそへ心をかハしたるハ  
もりのちしろく成也心かはり

なきハ色かわらすいつもくれな

ひもおもハぬもおもふ中是にて  
しるへしふかき恋也 一むつ

かたりと云事むつことの事也(21才)

御川水と申ハ大裏の庭に

たき物を水の上にうつみて

なかつ川也是を御川水と申

せりたきもの付へし一御川

水をあくた川共いふ也大内の

ちりあくたを彼水にておし

なかつ也されハあくた河共申

也何も大内の事也

御川水に柿の葉文付る事ハ

業平のきさきを恋て御川水

にかきの葉に文を書てなかし

給ひぬ是をきさき取あけて(21ウ)

見給ひて後うちとけ業平に

契愛し給ふと也されハ御川

水に柿葉文つけへし柿の

葉の文字共すへし朝山梵

灯か連哥

②⑤かきの葉のふみをそなかつ御川水

一 みとりの花の文字ハ桜也人丸連哥に

②⑥もろこしのみとりの花の色くくに

雪くれなひに袖のしらゆふ

梵灯か発句に

②⑦春はまつ緑の花のはつな哉

一 さほ姫春を守神の名也た、(22才)

さほ姫とすれハ神祇に非ず花

と芳野などもさほつけへく候

一 立田姫秋をまほる神也紅葉

なと付へし

一 郭公のいみやうハ しつ鳥

いもせ鳥 ありあけ鳥あみ鳥

くきら鳥 すれ鳥 卯の花鳥

橘鳥 都鳥 よたゝ鳥 田

哥鳥 早苗鳥 百聲鳥



五色聲鳥 たそかれ鳥 五

月鳥 春秋鳥郭公の事也

一 桜あさ六月也鹿(つゝ)の中に(22ウ)

葉の色付てもみちした

るをさくらあさと申也桜あ

さ引ともすへし

一 唐のきぬた八月名月の

夜打はしめ候也日本にては

きぬた打事更にさたまら

す候八月十五夜に礎打と

云事付へし朝山梵灯か句に

②⑧打初る今夜の月の花衣

これハ唐のきぬた也

一 田の雲いな葉の雲の事也

山田の雲も同事秋也(23オ)

一 此手柏女郎花のいみやう

秋なり本哥

一 ②⑨むさしの、此手かしハのたハかやに

風にみたる、恋の尾す、き

一 鬼のしこ草秋也是ハしおん

といふ草也

一 やなくひ草秋也あつさ弓なと、付へし

一 すけの庭鳥是ハ藝のいみやう也

本哥

③⑩深山ともいふほと里は荒はて、

蓬か本のすけの庭鳥

一 海のみやこりう宮の姫宮にて(23ウ)

御座也満干のたま浦嶋海の

都可付候

一 海のふすま是ハ海の晴やらす

くもりたる也須磨に海の宮

こ月のかほ海のふすま可付候

一 海のふすまの本哥万葉の内に

③⑪引かふる海のふすまも一色まで

すまの山風雲寒きかな

海のくもりて物ふかき色さ

むくみえたるをよみたる哥なり

天人などの衾にあらず

一 波ま柏と申事海の中なる岩に(24オ)

付たるかきの事也本哥万葉に

③②なにハめか波はかしはを取からに

日も暮かゝる袖の月かも

難波めとハなみに住「スル」いやしき賤  
の女なり

一 玉かしハとは海川の底にある  
石の名也これ思ひのふかき物也  
恋のおもひ深きなどに付へし  
本哥古吟に

③③難波江の藻にうつもるゝ玉柏  
あらハれて猶人を恋はや

玉かしハひろふなとゝすれハ貝也(24ウ)  
たゝ玉かしはとすれハ石の名也本  
哥に貝ひろふも玉ひろふも  
読なり

一 宇治の中宿と申事ハ玉かつ  
らと申せし女房はつ瀬と宇  
治の間に中宿をとりたまふ

一 ゆるきの森近江の国の名所也  
たかま「し」と申所に本哥万葉に

③④高嶋や近江の海の□□□□ハ

一 ゆるきの森のかげのしら鷺  
須磨のなて物と云事ハ是は  
源氏すまに下給ふ事年く(25オ)

三月廿日余にはらひをしたま  
ひし也此はらひのへいをなて  
物といふ也須磨にもはらひにも御  
祓にも三の月のはらひにも  
撫物と可付候

一 天の名種と申事七月七日の  
事也大内にて七夕にたから物を  
舟車につみて手向る事お  
天の名種と云也七夕の舟事  
共すへし

一 つはめの文と申事ハ昔日本  
にハ桃の花なかりし也大国の(25ウ)  
王より紫の花を一ふさ文に  
添てつハめの翹にむすひ  
付て日本の王へ遣しける後  
燕たかしかに本朝の大内の  
庭へおとしけり君ハ御覧して  
ふし儀なる事とおほしめしいそ  
きゑひらんありしかハ桃の花  
の一とつふさに文ありさてこそ  
つハめのふみつハめの使花

のふみかやうの古事さらにしらぬ事也是に寄合也日本より

大唐への御返事ハあを鳥に(26オ)

ふみを色々と書たまいて大唐へ

おくられ給ぬそれよりつハめを

あを鳥といふ也詩の詞にハせ

いてうといふ也哥位にハ青鳥と云也

しとねの文須磨にてのふみ也源

氏都よりの文おをき忘給ゆへに

しとねのわすれふみ共たゝ忘文

ともすへし

一 宇治の打とけふみ北山へ送し

文也源氏むらさきの方へ送たま

ひし也打とけ文に北山付へし

一 又こと染あやめ重のふみ是は(26ウ)

恋也うつ山ふみ是も恋

の文也紅葉色のふみみちの

くのかみのふみ使のふみ紫の文

是等ハ何もこひのふみ也

一 心の水命の水道まことの水

にてハなし心のかはる事を水に

『歌道寄合肝要集』翻刻と解題

たとへたる迄也命のあわれなる

事をたとへたる也本哥万葉に

③⑤ ふちハ瀬に隙なくかはるあすか川

人のこゝろの水やなかるゝ

③⑥ いつをとハさためぬ身こそ悲しけれ

命の水のなかれひぬまを(27オ)

いのちのたゆにも□水にたと

ゑたるなり

一 よふこの渡りハつくしまつらの

内の名所也唐船の津也よふこ

嶋とも云也

一 つくゑ嶋越中の名所也難波

の蘆よりおもしろきあしあり本哥に

③⑦ 手ならひのつくゑの蘆も冬枯て

すゝりの海といふへかりけり

一 老せぬ山出雲の国の名所也

大社の上なる山の名也本哥万葉に

③⑧ 春秋も老せぬ山の小松原(27ウ)

いかにか雪の衣忘るゝ

老せぬ山に小松原付へし

一 清水の浦同所也

一 こぬ身の濱播磨也本哥に

③⑨ いほさきや来ぬみの濱のうつせ貝

たかあた人に名をしらせけん  
うつせかいほさきこぬ身の

濱に付へし

一 目覚種これハ更につたはり

たる物なし風の音雨の音鐘  
の声又雪月花何もめさま

すものなり（28才）

④⑩ さなきたに波の音俱る須磨の浦に

めさます草の山あらしふく

須磨に付へしまことの目覚草

にてハなし田舎の連哥すゑつ

かたにさためてする程に句つ、

りおほく作意もせん□也

一 あつかひ草とハ世の中に人の

よきあしきを云事也まことの

草にてハなしあつかふたねを

草にいふなり

一 鹿嶋の明神の御名いそら翁と

申也た、磯共すへし龍都へ満（28ウ）

干の玉かり給時御使にかしまの

明神くたらせ給ふ也是しん

くうくわう宮の御時也むくり

日本へこし日本をとらんとせし

時より鹿嶋を磯良の神と

申せし也満干の玉いそらの

つかひ共可付候

一 や□むの神と申も鹿嶋の

明神の御事也大海をまほり

給ふ神にて御座也されハ御かほ

に海のかきと申かひつら付て

ましますなりと云云（29才）

以上藻塩草に

天文七年戊戌六月七日書之

難背御意候間有枯にも筆表過岳（29ウ）

付記…閲覧、翻刻の許可をいただきました宮内庁書陵部に、感謝

申し上げます。また、共立女子大学名誉教授内田保廣先生

に、翻刻にあたって数々のご助言をいただきました。心よ

り御礼申し上げます。